

【作品解説】

福田 太華 《孔雀図》

金子 岳 史

江戸時代、熊本では、矢野派をはじめとして様々な絵師が活躍したが、その中で、福田太華（一七九五～一八五四）の活躍は目を見張るものがある。

太華はもともと絵師ではなく、本来は藩の馬医であった。馬医が作画活動をするというのは、一見違和感があるかもしれないが、江戸時代後期になると武家故実へ感心が高まり、馬を扱う職にはそういった知識・教養が求められたと考えられる。たとえば天保四年（一八三三）に太華が犬追物絵巻の模写を命じられているのは、馬と故実の知識を買われてのことであろう。太華は書画の他にも、弓馬・火術・水練・故実・武器武具など、ありとあらゆる分野に精通していたとされる。^①

当時の熊本藩主細川斉茲は、古絵巻の模写や中国絵画の蒐集、《領内名勝図巻》の制作を命じるなど、とくに絵画に造詣が深かった。太華は斉茲の命で数々の絵巻物の模写を行い、また中国画から学んだ花鳥画を多く描いた。

太華の筆力を見るのに一番わかりやすいのは《蒙古襲来絵詞》の模本であろう。この作品は熊本藩に伝わっていたので、他にも様々な熊本の御用絵師が模写を遺しているが、太華は、単に原本の色と

形だけではなく、中世大和絵らしい闊達な墨線までも忠実に再現して、他の絵師のものと比べて擻んでていることがよくわかるだろう。^②

太華は、花鳥画のなかでも孔雀図を多く描いた。熊本県立美術館には、太華による墨画の孔雀図が数多く収蔵されている。その中でも、二幅対の《孔雀図》（口絵1）は、孔雀と花鳥を墨画で描いた作例である。右幅は右上の岩の下から伸びる桜の枝に孔雀が留まり、体を横に曲げている格好である。羽根は上方に伸び、画面上端に達する。細緻な筆で羽根の毛を描き、模様を部分ごとに明快に描き分けることにより、墨画でありながら、孔雀の羽根の複雑さを見事に表現している。また、尾の部分の羽根は闊達な線とその柔らかさを見事に表出している。左幅は、雌孔雀と、その背後に岩と大輪の牡丹を描く。牡丹の周囲には蝶が跳ぶ。全体的に欲張りすぎて、やや煩雑な印象は否めないが、太華の画技の巧みさがよく表れた作品と言えるだろう。本図と同図様の作品がもう一組県立美術館に収蔵されており、太華の定番の図様であったのかもしれない。

太華の花鳥画は、出来のよいものとそうでないものの差が大きいが、永青文庫所蔵の彩色の《孔雀図》（図1）は、現在確認されて

いる太華の花鳥画のなかでは、もつとも優れたものであろう。薄墨と金砂子で装飾された背景に、岩に佇む雄雌の孔雀を中心に、様々な小禽や、花木を鮮やかに描いている。禽や花の描写に若干硬さが感じられるものの、孔雀の羽は細部まで非常に緻密に描き込む。そして孔雀の立つ岩は、太い筆で大胆に一気に呵成に描く。波打つような描線は、やや大胆過ぎて奇抜な描写にも見えるが、細密な花鳥をいっそう際立たせるとともに、大幅の画面が緻密なだけの息苦しいものとならないように、変化をつけているように思われる。

孔雀は、古くは仏画における孔雀明王像や、四季花鳥図屏風などの一モチーフとして描かれてきたが、このように孔雀を主題としてその羽根の美しさを様々な角度から描いたのは、円山応挙が《牡丹孔雀図》（相国寺承天閣美術館蔵）にて典型を示したことに端を発する³。墨画の孔雀も、最晩年の《松に孔雀図》襖絵（兵庫・大乘寺蔵）が有名である。太華の永青文庫本も、孔雀を岩の上に配し、その長い羽根を岩の下まで垂らすことで艶やかな羽根を存分に描き、牡丹を添えるという構成は、応挙の相国寺本と共通する。

しかし、雪舟流の継承を謳う矢野派が全盛であった当時の熊本



図1 福田太華筆《孔雀図》江戸時代後期 永青文庫所蔵

で、太華は円山派の孔雀図をどのようにして学んだのであろうか。

これについて、現存作品から一つの可能性を探るなら、永青文庫に伝わる森徹山筆の《孔雀図》（図2）の存在が注目される。徹山は、森派に学んだのちに、円山応挙の門下に入り、「応挙十哲」の一人として数えられた、応挙直系といえる絵師である。右下に羽根を垂らす孔雀の形も然ることながら、徹山画の、孔雀を乗せて逆S字型に伸びる海棠の樹木の構図は、孔雀が留まる部分を岩、孔雀の頭上に展開する海棠を画面右方から伸びる木蓮に置き換えれば、太華画の構図と一致する。徹山の《孔雀図》は、藩主が参勤交代で持参した道具の目録『御参勤交代江戸御持遣』に、斉茲が享和二年



図2 森徹山筆《孔雀図》(右幅) 江戸時代後期
永青文庫所蔵

(一八〇二)に熊本へ帰国する際に、本図と考えられる「式幅對孔雀」を持ち帰ったという記録がある。⁽⁴⁾ 齊茲のもとで中国画や絵巻の模写を行った太華は、おそらくこの絵を見たであろう。

また、永青文庫に伝わる徹山の婿養子・森一鳳の《唐夫人・孔雀図》三幅対における、左幅の雌孔雀(図3)の型は、永青文庫本の雌と同一である。この《唐夫人・孔雀図》の伝来経緯は不明であるが、一鳳は徹山とともに細川家に仕えたといわれる。⁽⁵⁾ おそらく太華は、徹山・一鳳やその作品から、応挙様の孔雀図を学んだのではないだろうか。

そして、太華の永青文庫本《孔雀図》を踏襲したとみられるのが、明治時代中期に杉谷雪樵が描いた《花鳥之図》(宮内庁三の丸



図3 森一鳳筆《唐夫人・孔雀図》(左幅・部分)
江戸時代後期 永青文庫所蔵

尚蔵館蔵・図4)である。岩に留まる孔雀、岩から木蓮の樹木にかけての構図は、太華の永青文庫本に倣っているといえよう。

つまり、孔雀図が、円山応挙から森徹山・一鳳を通じて福田太華に伝わり、それが明治時代の杉谷雪樵まで連なるという、一つの主題・図様が熊本という一地方へと伝わり、踏襲される過程がたどれるのである。雪舟流の矢野派や江戸狩野派だけでなく、京絵師の円山派の画風が熊本に伝播したのは興味深く、それは絵画好きであった齊茲の所産ともいえよう。

しかし、徹山・太華・雪樵の孔雀図を見比べてみると、画面の艶やかさ、羽根の柔らかさにおいて、太華の作品が一步優れているように思われる。応挙本人にはさすがに及ばないにしても、応挙の高



図4 杉谷雪樵筆《花鳥之図》 明治時代中期
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

名な直弟子たちに勝るとも劣らないものといえる。

先述のように、太華は様々なジャンルの作画を手がけており、そもそも専門の絵師ではない。本稿で紹介した《孔雀図》は太華の非常に多様な活動分野のなかの、ごく一つにすぎないのである。非常に興味深い人物であり、今後より注目していきたい。

【註】

- (1) 「肥後の近世絵画史概説」（『展覧会図録『肥後の近世絵画』熊本県立美術館 一九七九年）参照。
- (2) 展覧会図録『開館二十五周年記念 蒙古襲来絵詞展』（熊本県立美術館 二〇〇一年）参照。本書には《蒙古襲来絵詞》の諸模本が数多く掲載されているが、たとえば松の幹の描写を、太華による菊池神社本と、他の絵師のものとを比較すると、太華の筆力がよくわかるだろう。
- (3) 応挙様の孔雀図の成立と展開については、冷泉勝彦「新しい美の典型―花鳥表現（孔雀図その1）」「同（その2）」『日本美術工芸』六一四・六一五―一九八九年）参照。
- (4) 展覧会図録『大名細川家の至宝』（山梨県立美術館 二〇〇一年）参照。
- (5) 徹山と一鳳は、細川家の藩臣となったことが知られている。斉茲と森派の關係については、平林彰「細川齊茲をめぐる近世画壇―『御参勤江戸御持遣』から―」（『大名細川家の至宝』山梨県立美術館 二〇〇一年）参照。